

ご意見ご連絡は下記へどうぞ

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭 e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association

Website は「北海道野生動物研究所」と入力して下さい

「北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association の活動目的

熊の実像について調査研究し、熊による人畜及びその他経済的被害を予防しつつ、人と熊が棲み分けた状態で共存を図り、狩猟以外では熊を殺さない社会の形成を図るための提言と啓発活動を行う。

この考えの根底は、この大地は総ての生き物の共有物であり、生物間での食物連鎖の宿命と疾病原因生物以外については、この地球上に生を受けたものは生有る限りお互いの存在を容認しようと言う生物倫理(生物の一員として人が為すべき正しき道)に基づく理念による。

II 2月の熊ヒグマの生活について

熊は皆、今は山の斜面に自分が掘るか、他の熊が掘って使わなくなった横穴に入っただ冬籠り中。穴に入る時期は積雪量とは無関係で11月下旬～12月に入り、出る時期は翌年の3月下旬～4月、遅くとも5月の初めには出る。遅く出るのは、新生子を伴った母子。

冬籠り中は、絶食状態で過ごし、口にする物は時々雪や土や敷きわらを、なめり飲み込む程度。妊娠した雌は、1月から2月に子を産むので、新生子のいる母は、今、子に授乳し育子の真最中です。糞尿も母がなめりとして飲み込んでしまう。熊の乳頭は胸に2対4個と下腹部に1対2個ある。授乳中の乳頭の大きさは、直径・高さとも1.5cm程在って、授乳中の婦人に似ている。この他、満1、2歳過ぎの子と一緒に同じ穴で冬籠もりしている母子以外は、皆単独で冬籠もりしています。熊の冬ごもりは、山野を跋涉しての活動期に、身体に養分を蓄えているので、絶食でもひもじくありません。熊にとっての冬は悠々自適の休養期です。羨ましいですね。

<新生子>

妊娠期間は約8カ月間。出産期は1月から2月中旬で越冬中の穴で産む。1978年～1983年の6年間に捕獲した232組の母子の調査では、同腹の産子数は1～3頭で(単子が119組51.3%、双子が109組47%、三子が4組1.7%)、平均産子数は1.52頭、産子の性比は雌1頭に対し、雄が1.3頭である。新生子の頭胴長は25～35cm、体重は300～600g、目は閉じていて見えない、歯は生えていない、体毛は全身に7～8mmの産毛が疎生。育子は雌(母)だけがする。乳歯は20

日令頃から生え始める。目が光に反応し始めるのは 50 日令頃から、音に反応するのは 45 日令頃からである。子は 4 カ月令になると乳犬歯以外の乳歯が生えていて、親と同じ物を食べ始める。子は 1 歳過ぎないし 2 歳過ぎの、いずれも、5 月から 8 月の間に母から自立する。

<鳴声>

<1> 新生子や子グマは、bya- ビャー、pya- ピャー、gya- ギャーgya- ギャーなどと時に応じて力強み、あるいは穏やかに、また時には弱々しく鳴く。元気に泣いているときは、雪で完全に埋もれている冬籠もり穴の外、穴の入口から 10m 程離れて居ても、この泣き叫ぶ声が聞こえる。

本研究会報第 18 号で、告示した 2013 年 11 月 5 日、UHB 大学主催で、「熊とは、そして、札幌の市街地に熊が出て来る本当の理由」と言う題で、門崎允昭が約 80 分間、道新ホールで 500 名程の聴衆に講演をした際の全文を、順次、本会報に掲載することを申しましたが、今回はその 2 回目として、下記文章を掲載致します。お読み下されば幸甚です。

『クマ類の起源』についてお話しします

クマ類の先祖探しは化石によって行います。具体的には、現存する 7 種のクマ類に共通した特徴で、しかも熊類以外の動物には見られない特徴を備えた化石骨や歯を探し出して、その中で、最も古い年代の地層から産出した化石種を、クマ類の祖先と決めるのです。このようにして調査した結果、地球上に最初のクマが出現したのは、今から約二千万年前で、このクマの化石は、現在で言えば、ドイツのエルク地方などから出土していて、この化石を研究したドイツの古生物学者シュテリン氏によって 1917 年（今から 97 年前）に「エルクの先祖熊」という意味の学名 *Ursavus elmensis* が付されています。この熊は、化石骨の比較研究からイヌ類と共通の先祖から進化した事が解っています。犬も熊も走ると追いかけて来ますが、これは共通の先祖から進化してきたことを示す例です。このクマは化石の形態から、身体の大きさは体長（鼻先から尾の付け根までの直線距離、の事です）が大きなもので 80cm ぐらいであったろう、と考えられています。

当時の陸地や海の形や気候も、現在とは大きく異なっていて、一緒に見つかった動・植物の化石から、現在のドイツやフランスに相当する一体の気候は、亜熱帯で、シュロやヤシの木が茂り、沼や河には、ワニが棲んでいたことが分かっています。このエルクの熊も骨と歯の形から、木に登り、時には遊泳などしながら、雑食性の生活をしていましたようです。

以来クマ類は今日まで 2,000 万年という悠久の時の流れの中でその時代その土地の環境に適応するために進化して来ました。そしてこの間に色々な種類のクマが出現しては絶滅していった訳です。

(了)